

Title	多様な"中国語"を受容可能にする授業へ： ドイツの大学における中国語教育の事例から
Sub Title	Methods of improving acceptance among learners of the diversity of Chinese language variants : a case study of Chinese language teaching at German universities
Author	山下, 一夫(Yamashita, Kazuo) 吉川, 龍生(Yoshikawa, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.18, (2021.) ,p.19- 39
JaLC DOI	
Abstract	<p>In many German universities, Taiwanese professors and lecturers teach the Chinese language. This is partly because many German universities have accepted Taiwanese lecturers dispatched by the ROC (Republic of China) government's Chinese language teacher dispatch program, which has served as an extension of the strong links between West Germany and the ROC that existed during the Cold War. These teachers have received special training in Taiwan which allows them to teach standardized Chinese Mandarin.</p> <p>At the same time, however, they do not hesitate to teach Taiwanese-specific vocabulary and pronunciation in intermediate- and higher-level Chinese classes. For many years, these teachers have been using online tools in their classes, and once the COVID-19 pandemic led to fully online learning, they moved to further develop various remote teaching methods. These methods will likely remain in use even after the pandemic is over.</p> <p>Students in Japan should also be taught a diverse range of Chinese language variants spoken in different regions, harnessing Chinese language education in Germany as a reference. Using online tools is an effective method of promoting this goal.</p>
Notes	研究論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20210000-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

多様な“中国語”を受容可能にする授業へ

——ドイツの大学における中国語教育の事例から

山 下 一 夫
吉 川 龍 生

Abstract

In many German universities, Taiwanese professors and lecturers teach the Chinese language. This is partly because many German universities have accepted Taiwanese lecturers dispatched by the ROC (Republic of China) government's Chinese language teacher dispatch program, which has served as an extension of the strong links between West Germany and the ROC that existed during the Cold War. These teachers have received special training in Taiwan which allows them to teach standardized Chinese Mandarin.

At the same time, however, they do not hesitate to teach Taiwanese-specific vocabulary and pronunciation in intermediate- and higher-level Chinese classes. For many years, these teachers have been using online tools in their classes, and once the COVID-19 pandemic led to fully online learning, they moved to further develop various remote teaching methods. These methods will likely remain in use even after the pandemic is over.

Students in Japan should also be taught a diverse range of Chinese language variants spoken in different regions, harnessing Chinese language education in Germany as a reference. Using online tools is an effective method of promoting this goal.

一、はじめに

現在、日本の大学の中国語教育は、大きな転換点を迎えている。

まずは、多くの大学で2020年度から実施されたオンライン授業である。もちろん以前からICTを利用する試みは様々な場所で行われてはいたが、大学全体から見ればごく一部に留まっていたといえる。しかしCOVID-19の流行により教室での対面授業が不可能となったことで、多くの教員が否応なしにオンライン授業を実施せざるを得なくなった。その過程では混乱も起こり、またオンライン授業の様々な欠点も知られることとなったが、一方で教員や学生が様々

なオンラインツールに習熟し、その利便性が理解されたことで、従来の授業の方法に対する反省も見られることとなった。

また、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の普及も重要である。A1 から C2 として示された共通参照レベルは、HSK などの中国語検定試験に大きな影響を与え、これに対応した内容が整備されていった。共通参照レベルばかりが利用され、複言語・複文化主義や行動中心主義といった CEFR の重要概念が抜け落ちていることに対する批判もあったが、CEFR に盛り込まれていた言語観は、日本の中等教育における外国語の学習指導要領に絶大な影響を及ぼすことになり、それに基づいて行われた新しい外国語教育を受けた世代が、今後大学の学生の主体となる。そうした中で、大学の中国語教育も今まで行ってきた方法を更新する必要が生じている。

これに加えて、東アジア情勢の変化もある。今や中国はアメリカと並ぶ大国となり、日本社会における中国のイメージは、前世紀は言うに及ばず、2000年代と比べても大きく異なっており、学生たちが中国語を履修する動機も、現在教壇に立っている世代とはかなり違っている部分もある。学習者の興味が以前と異なっているのであれば、教員の側もこれに対応していく必要があるだろう。

筆者たちは COVID-19 の流行以前の2017年に、イギリスにおける中国語教育の状況について取材を行い、それを元に日本の大学の中国語教育の改善についての検討を行ったⁱ。これを受けて今度は2019年6月にドイツを訪問して、現地で行われている中国語教育について初歩的な調査を行い、さらに2019年の11月に台湾でも関係者へのインタビューを実施した。その後は COVID-19 の流行によって現地調査ができなくなったが、逆にその間、ドイツや台湾ではオンライン教育についての様々な試みがなされ、それをやはり関係者にオンラインで取材することによって、多くの知見を得ることができたⁱⁱ。

そこで本稿では、そうした調査によって知り得た幾つかの事例を紹介するとともに、そこから本邦の中国語教育、特にアフターコロナにおける教育のあり方について考察を行いたいと思う。なお、我々が取材することができた大学・教員は、ドイツ全体から言えばごく一部に過ぎず、ドイツで行われている中国語教育を網羅的に紹介することは意図していない点、了解いただけると幸いである。

二、ドイツにおける台湾人中国語教員のプレゼンス

日本の大学の中国語教育と比べた場合、ドイツの大学の中国語教育に特徴的なのが、台湾人教員のプレゼンスである。もちろん日本の大学でも、多くの台湾人教員が教壇に立ち、中国語教育に従事している。しかしドイツで特筆されるのは、台湾の中国語教員養成の実習生を多くの大学が受け入れている点である。Ewa Zajdler (2019) では以下のように述べられているⁱⁱⁱ。

国立台湾師範大学華語文教学研究所（現在は華語文教学系の所属となっている）の学生は、台湾か海外で必ず教育実習を行うことになっている。この海外実習プロジェクトはヨーロッパの中国語教育において、経験を積むことができる実習生と、外国語として中国語を学ぶ学生の双方に利益をもたらす、特別なルートとなっている。（…）現在行われているルートは、台湾師範大学が、外国語としての中国語教育の訓練を積んだ数十名の大学院生を、修士論文完成前に著名な大学で実習を行わせ、教育現場で経験を積ませる、というものである。ヨーロッパの大陸部でこれを実施している大学は、ライデン大学（オランダ）、ハイデルベルグ大学（ドイツ）、ヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学（ドイツ）、ゲッティンゲン大学（ドイツ）、シュトゥットガルト大学（ドイツ）、トリーア大学（ドイツ）、ワルシャワ大学（ポーランド）、マサリク大学（チェコ）、パラツキー大学オロモウツ（チェコ）などがある。

この台湾からの中国語教育実習生受け入れは、日本の大学ではほとんど行われていないが、上の引用から分かるように、ヨーロッパでは複数の大学が実施しており、中でもドイツが突出している。その理由の一つとして挙げられるのが、西ドイツ時代からの台湾との結びつきである。両国は戦後、ともに西側陣営に属する分断国家として、様々な分野で協力体制を敷いてきた。そして西ドイツの中国研究がナチスによる破壊から復興・発展する中で、多くのドイツ人が台湾に留学して中国語を学び、その後台湾の大学と提携関係を結ぶ素地を作った^v。信世昌、張鳳圻（2009）では以下の様に述べられている^v。

東西ドイツ時代、1960年代から1980年代は中国研究やその教育が次第に発展し、ハンブルク大学やボン大学（ライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボン）で相次いで漢学専攻や中国語コースが開設された。特に1960年代以後、西ドイツは経済成長が始まり、中国語学習者の大多数が台湾に留学した。そのため（ドイツの中国語研究者には）T・グリム、ヴォルフガング・バウアー（1930-1997）、ユルゲン・ドームス（1932-2001）など、多くの台湾留学経験者がいる。

もう一つの理由は費用である。ドイツは連邦制を採っており、教育制度や予算などは州ごとの管轄となっているが、概して学校に割り当てられる経費は少ない。そのため21世紀になってから急増した中国語学習者に対応しきれていない状況にあるが、この実習制度は台湾政府の教育部（文部省）の予算補助が下りるため、ドイツ側にとっては安価に中国語教員を雇用できるというメリットが存在するのである^{vi}。

ただしドイツにおける中国語学習熱は、台湾ではなく中国大陸側の経済発展に拠る部分が大

きい。これについて、信世昌、張鳳圻（2009）では以下の様に述べられている^{vii}。

中国語学習の需要と貿易の発展は常に関係がある。2002年に中国大陸は日本を抜き、ドイツにとってアジア最大の貿易相手となった。また中国にとってドイツは、EUを除くとアメリカに次ぐ第二の貿易国であり、ヨーロッパの中では30年間連続で首位を占める貿易国である。そのため、中国業務部門を持つ多くのドイツの企業は中国語ができる人材を採用し、中国に派遣して市場の開拓を行っている。ドイツのヴェストファーレン・ヴィルヘルム大学の学生はこう言っている。「ドイツには中国語を話すことができる人はあまり多くないので、中国語を勉強すれば就職に有利になると思いました。現在、中国には多くのビジネスチャンスがあり、たくさんのドイツ企業が中国に支社を設立していて、ドイツと中国の商業的關係がますます緊密になってきているからです。」

実際、多くのドイツ企業が中国で事業を展開しており、例えばフォルクスワーゲングループは、西ドイツ時代の1985年と、西側諸国としてはかなり早い段階で中国に工場を設立し^{viii}、また2002年にはティッセン・クルップ社とシーメンス社が中国との共同出資で上海マグレブを開通させており^{ix}、さらにシーメンス社が中国に高速鉄道の技術移転を行った CRH3 も2008年から営業運転が開始となっている^x。こうした状況は、明らかにドイツにおける中国語学習熱を牽引していると言えるだろう^{xi}。

台湾政府は、こうした中国大陸側で起こった経済発展と、それに付随して海外で発生した中国語への関心を利用し、台湾の国際的地位を高めるために、実習名目でドイツへ安価に中国語教員を派遣している。一方の中国政府も、2006年のベルリン自由大学を皮切りとして、台湾政府に対抗するようにドイツ国内に次々と孔子学院を開設し、国家漢語国際推広領導小組弁公室（略称「漢弁」、2020年より「教育部中外語言交流合作中心」に改称）から中国語教員を派遣している^{xii}。

よく知られているように、台湾で用いられている中国語は、現在一般に「台湾華語」と呼ばれている。中国大陸の中国語である「普通話」と、基本的には同一の言語であるが、発音・文法・語彙など様々な点で違いがあり^{xiii}、また文字も日本の旧字に相当する「正体字」（いわゆる「繁体字」）や、発音記号として「注音字母」が用いられている。しかしドイツ国内で需要があるのは基本的に中国大陸の普通話で、台湾華語ではない。そのため台湾人教員は、台湾師範大学華語文教学系の大学院などで普通話の訓練を受けてからドイツに派遣され、現地では中国大陸の発音・文法・語彙の教授を行っている。

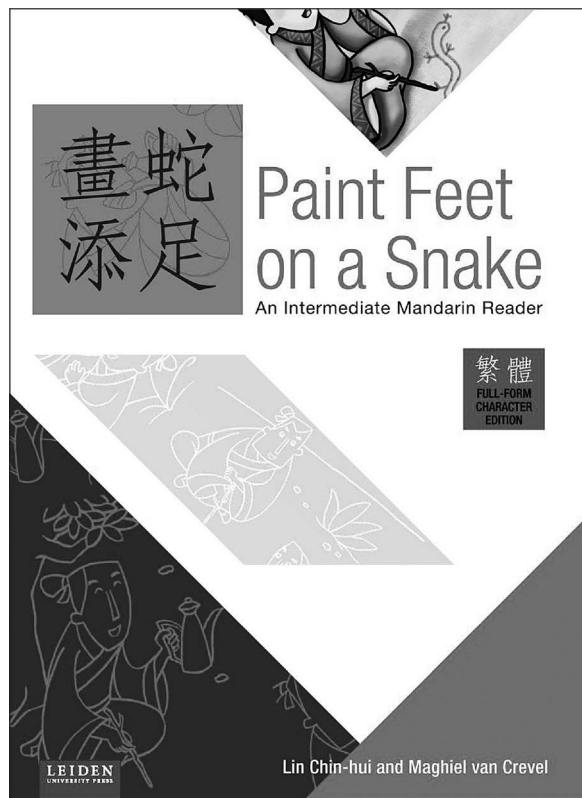
台湾人が発音の矯正を行って中国大陸の普通話を教えるのは、いわば「演技」ではないか、と思うかも知れない。しかし程度の差はあれ、同様の行為は中国大陸出身の教員も行っている

ことである。普通話「北京語音を標準音」としているが^{xiv}、北京市内で一般に用いられている発音と同一ではないため、北京出身者であっても外国人に中国語を教える場合は一定の訓練が必要となる。まして北京以外の地域の出身者であれば、そうした「矯正」は必須になるので、その点において台湾人は中国大陆の地方出身者と特に違いはない。

また授業では、例えば書道や中国絵画、年中行事といった、中国文化の紹介を行うこともある。台湾は、政治体制の上では中国大陆と異なっているものの、一方で中華圏の一地方としての性質も有しているため、そうした知識の面でも特に問題はないことになる^{xv}。

三、台湾人教員と中国語の多様性

台湾人教員はさらに、「繁体字」も自由に扱うことができるという点で、中国大陆出身者より教学上「有利」であるという側面もある。図一は、現在ドイツのフンボルト大学で台湾人教員が用いている中国語の教科書、『Paint Feet on a Snake』である^{xvi}。



図一

いわゆるリーダーのテキストで、図一で示したのは繁体字版であるが、簡体字版も用意されている。この教科書の第一課「畫蛇添足」の冒頭部分には、以下のような文章が収録されている。

戰國時代，楚國有個人請幾位客人喝一壺酒。這些客人看了看這壺酒，想：「壺裏的酒這麼少，怎麼夠我們大家喝呢？」其中有一個人，叫李大，他這個人有點兒自大，但是很聰明。他馬上就想到了了一個主意。他對其他人說：「我們來比賽吧。只要贏了就能得到這壺酒，怎麼樣？」有人說：「你的主意好是好，不過我們該比什麼呢？」李大說：「就比畫蛇吧。誰先畫完，誰就可以把酒喝掉。」其他的人商量了一下，覺得這個辦法大概還不錯，就同意了她的辦法，決定這麼做。

(筆者訳：戦国時代、楚国である人が何人かの客人に酒を一壺ふるまった。客人たちはその酒壺を見て思った。「壺の中の酒が少なすぎて、我々全員が飲むには足りないだろう。」客人の中に李大という人がいて、すこし尊大なところはあったが、たいそう頭が良かった。かれはすぐに良い考えを思いついて、周りの人たちに言った。「私たちが勝負をしようではないか。勝った者だけがこの壺の酒をもらえるということでどうだろう。」ある人が言った。「君の考えは、良いには良いけれど、私たちは何で勝負するのですか。」李大は言った。「蛇の絵で勝負しようではないか。先に描き終えた人が酒を飲むことができるのだ。」他の人たちはすこし相談した結果、この方法で良いだろうと考え、彼の提案に同意した。)

「畫蛇添足」は、中国語では四字熟語として使われる表現で、日本語の「蛇足」の故事に相当する。上の文はその典拠となった『戦国策』の一節を、現代中国語にリライトし、中国語中級学習者のための教材としたものである。このテキストはこのように、中国語で常用される四字熟語を題材に、典拠となる古典の内容を現代中国語にした文章を各課に収録している。全体の内容は以下の通りである。

第一課 畫蛇添足／第二課 走馬看花／第三課 大公無私／第四課 朝三暮四／第五課 塞翁失馬，安知非福／第六課 狐假虎威／第七課 杞人憂天／第八課 濫竽充數／第九課 井底之蛙／第十課 自相矛盾／第十一課 一鳴驚人／第十二課 小時了了，大未必佳

ドイツの大学で中国語の教授を行う学部・学科は、古典文学や東洋史を包括した「漢学」という専攻であることが多く、そのためそこに所属する学生は、現代中国語だけでなく、中国の古典（「古代漢語」）も学ぶ必要がある。以下は、2008年のデータではあるが、ドイツの代表

的な五つの大学における第一学期から第六学期までの、授業時間の一覧である（なお、表中の「数字/数字」は「1週間の授業時間数/単位」を示している）^{xvii}。

	1学期	2学期	3学期	4学期	5学期	6学期	総計
ベルリン自由大学	8/8	8/8	8/7	8/7	閲読課程 4/4	閲読課程 4/4	40/38
ルール大学ボーフム	8/10	8/10	6/7; 古代漢語 4/7	6/7; 古代漢語 4/7	2/2.5; 閲読課程 2/3	2/2.5; 閲読課程 2/3	44/59
ボン大学（ライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボン）	8/12	8/12	8/12	6/12	6/12		44/72
フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン＝ニュルンベルク	8/10	8/10	4+閲読課程 2/10; 古代漢語	6/10			34/50
ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン	初級引導 3/2; 11/13	10/12	4+閲読課程 2/10 海外研修 14/24 (HSK参加)	(3/3)	(2/3)	42/57 (47/63)	

ここに見られる「古代漢語」のために繁体字学習の需要が存在し、その教育に台湾人が配置されることになる。『Paint Feet on a Snake』の繁体字版が、繁体字を媒介に現代中国語と古典の橋渡しをする内容となっているのも、一つにはそうした需要に応えるためといえるだろう。

一方、日本の大学の中国語教育において繁体字が対象となることはほとんどない。中国文学や東洋史などの専攻で中国の古典を中国語で読む場合、日本の文脈では日本語の「旧字」として理解することができるため、繁体字そのものを学習する特別な時間を設ける必要はないのだろう。しかしそのために、台湾や海外華人の間で行われている、「正体字」で表記された現代中国語の文章を学習する場は確保されていないともいえる。

そもそも日本の中国語教育は、文字に限らず、語彙や発音、さらに発音記号なども、中華人民共和国で公式に定められた普通話の枠組のみで行うことが一般的である。それは中国で出版された教科書も同様で、CDの音声は「標準的」とされる発音で録音され、会話の場面も北京など中国大陸の中に設定されていることが多い。

これに対して前出の『Paint Feet on a Snake』の著者の一人で、フンボルト大学の台湾人教員である林欽恵氏は、現在『Tage in Berlin（柏林日子）』というテキストを作成している。ま

だパイロット版のみで、正式出版はこれからということだが（2021年12月現在）、会話の舞台をベルリンにすることでドイツの中国語学習者に親近感を持たせ、さらに登場人物も「標準的」な発音の北方人の他に、「非標準的」な発音の南方人、台湾人、さらにドイツ人まで登場させ、実際にそうした音声を吹き込んでいる。

こうした繁体字や古典、地方的な発音・語彙などの学習は、教員によっては「学習者の混乱を生む」という懸念を持つかも知れない。しかし学習者は初級の段階ですでに中国大陆で「標準的」とされる普通話の発音や文字を学習しており、コアとすべき「モデル」を確立させているため、そうした心配は当たらないだろう。もちろん、ここで「台湾の中国語」を紛れ込ませることは、「自国」の言語を広めようとする台湾人としての考えもあるだろうし、またそれは、中国の経済発展による中国語学習ブームを利用して教員派遣事業を行うことで台湾の国際的地位を高めようとする、台湾政府の思惑とも合致する。したがってこうした行為は、「台湾による中国語学習の政治利用」だと、非難する向きもあるかも知れない。

しかしより重要なのは、そうした中国語の多様性の提示は学習者のニーズに合致するということである。『Tage in Berlin（柏林日子）』が敢えて「標準的」な発音の北方人の他に、「非標準的」な発音の南方人や台湾人の音声も収録したのは、学習者がドイツで接触し得る中国語話者の実態に合わせた結果である。研究にしても、ビジネスユースにしても、中国語学習者が「標準的」な普通話の話者だけに接触するということは、現実的にはあり得ないだろう。

そしてそれは、中国大陆においても同様である。中国大陆の各地にある外国人向け中国語学校では、もちろん「標準的」な普通話を教えているが、留学生は一步街に出ると、それとは異なる発音や語彙に晒されることになる。例えば李渊然（2021）では、中国西南部の四川省における次のような例を紹介している。

留学生たちが学校の外に出て、現地の住民と接触した時、複雑な方言環境の影響を受けるために、日常生活に不便を来してしまう。例えば四川省で勉強する留学生が市民に道を尋ねると、市民は「抵拢」（訳注：普通話で解釈すると「接触する」という意味になるが、四川方言では「まっすぐ行く」という意味）、「倒拐」（訳注：普通話で解釈すると「逆に曲がる」だが、四川方言では「曲がる」という意味）などの表現を用いるため、もし留学生が本当の意味を理解していないと、容易に誤解を招くことになる^{xviii}。

こうした事情は、例えば北京市の隣の天津市であっても同様である。刘颖、张少姿、卢颖、郭奇军（2011）では次のように述べられている。

発音や語彙、あるいは文法などの面で、天津方言は普通話とは異なっている部分がある。

対外漢語教育の任務は、まずは学生に第二言語を用いたコミュニケーション能力を獲得させることであり、次に第二言語に関連する知識やそれが内包する文化的知識を理解させることである。留学生は授業や学校内で普通話を用いてコミュニケーションを取ることができが、学校を出るとかれらは方言環境に直面する。そのため、適切な方言教育を行うことで、留学生が社会におけるコミュニケーションで遭遇する言語的障壁を減少させ、交際範囲を拡げさせることが必要である^{xix}。

なお、上記の四川省や天津市で話されている方言は、普通話やその基になった北京方言と同じ、「官話」という中国語の一種である。「官話」は「マンダリン」とも呼ばれ、中国の東北地方から西南地方まで非常に広範囲に分布しており、そのため内部分岐も大きく、北京官話、東北官話、冀魯官話、膠遼官話、中原官話、蘭銀官話、江淮官話、西南官話などの次方言が存在している^{xx}。先に挙げた四川省の方言はこのうち西南官話、天津市の方言は冀魯官話に属している。

中国語にはさらに、この官話のほか、呉語、閩語、客語、粵語、湘語、贛語、晋語、徽語、平話といった「漢語方言」も存在する^{xxi}。「方言」と言うと、日本語の語感ではせいぜい東日本方言と西日本方言程度の違いだろうと思うかも知れないが、実はこれらの漢語方言はヨーロッパ諸語間の差に匹敵するほどの相違があり、口頭で互いに意思疎通を行うことは不可能である。そのためこれらの漢語方言の話者は、公的な場などでは普通話へのコードスイッチを行うことが多い。しかしそこで話される普通話は、多くの場合母語である漢語方言の影響を受けた地方変種であり、これを「地方普通話」、あるいは「方言普通話」と称し、官話の次方言に類似した存在となっている。例として、日本では一般に広東語とよばれる粵語が話されている地域で用いられる普通話について、単韻鳴（2013）は次のような例を紹介している^{xxii}。

“V+下 hah”（すこし～する）は、粵語において優勢となっている表現であり、粵語地域の人々が普通話で「動作が短時間であること」を表現する際、往々にして無自覚にこの粵語の形式を使って“V+下 xià”と言おうとしてしまう。しかし普通話では一般に、動詞に“下 xià”だけを付けることはできない。（そのため、これによく似た）“一下 yí xià”であれば、厳密には短時間の動作の表現ではないが、時間が短いことや、動作量が少ないことを表し得るため、広東人が普通話を話す時、この“V+一下 yí xià”の形をよく使うことになる。しかし一般に中国語の教材では「動詞の重ね型」によって、動作の時間が短いことや、何かをやってみることを表現する、と説明されている。そのため留学生はおのずと“VV”によって「短時間の動作」の意味を表そうとする。以前、大変努力して中国語を勉強している、あるインドネシア出身の学生が不満を述べたことがある。彼女が買い物に行った

時、“我试试，可以吗？”（私はちょっと試したいのですが、よいでしょうか？）と言ったが、女性店員は意味が分からなかったので、仕方なくあれこれジェスチャーを行って説明した。するとようやく意味を理解した女性店員は彼女にこう言った。“我们说‘试一下’，不说‘试试’。”（私たちは‘试一下’と言い、‘试试’とは言いません。）その学生は、とてもがっかりした、街中の人たちに通じないのならば、授業で勉強したことなど役に立たないと感じた、と言うのである^{xxiii}。

中国大陸の普通話と一部の語彙や発音が異なる台湾華語は、台湾海峡を挟んだ政治体制の相違の結果という側面もあるが、基本的にはこうした中国大陸の地方普通話や官話の次方言と同種のものであるとすることができるだろう。そして台湾もまた、教室で留学生に教える中国語と、街中で話されている中国語の乖離という問題を抱えているが、状況は中国大陸よりやや複雑である。

台湾華語の元となっているのは、国民党政権が中国大陸における共通語として制定した「国語」で、1990年代くらいまでは台湾における留学生向けの中国語学校でこれが教えられていた。「国語」は普通話とほぼ同じ言語ではあるが、中華人民共和国では1950年代に文字表記を簡体字とピンインに改め、さらに一部の漢字音の整理・変更を行ったため、様々な点で相違が見られる。また台湾側も、閩語の一種である台湾語や、客語の一種である客家語、さらに多くの原住民言語が分布しており、「国語」はその普及の過程でそれら在来の言語の影響を受けて、発音・語彙・文法の一部が変質し、現在の台湾華語が成立した。そのため当時の留学生は中国大陸同様、一步街に出ると学校で習った「国語」とは異なる発音や語彙に晒されていたのである。

2000年代以降、台湾の中国語学校で教えられる中国語は徐々に変化した。図二は、台湾師範大学で用いられているテキストである、『當代中文課程』第一冊の一部である^{xxiv}。

この単語一覧の部分では、漢字は「正体字」が用いられているが、発音記号は中華人民共和国で作られたピンインと、台湾で一般に使われている注音字母が併記されている。しかしこの単語一覧に対応する前ページの会話文では、注音字母が消え、発音記号はピンインのみとなっている（図三）^{xxv}。

かつて台湾の中国語教科書がかたくなに導入を拒んでいたピンインが、あっさり使われるようになったのは、中国語非母語話者が注音字母を学習する困難に配慮がなされたことや、中国語の発音記号として世界的に優勢となったピンインを台湾政府が正式に承認したことが理由だが、同時にまたそれは中国大陸の中国語も視野に入れた結果でもあり、いわばドイツにおける台湾人中国語教員のあり方と軌を一にするものといえる。また台湾師範大学の教員は海外派遣組と同様、中国大陸の普通話の訓練を受けているため、オーラルコミュニケーションの点で

生詞一 Vocabulary I 04-2

Vocabulary					
1	一共	yìgòng	一共	(Adv)	altogether
2	多少	duōshǎo	多少	(N)	how much, how many
3	錢	qián	錢	(N)	money
4	老闆	lǎobǎn	老闆	(N)	store-owner, boss
5	買	mǎi	買	(V)	to buy
6	杯	bēi	杯	(M)	cup
7	熱	rè	熱	(Vs)	hot
8	包子	bāozi	包子	(N)	steamed buns with meat stuffing filling
9	要	yào	要	(V)	to want, to need
10	大	dà	大	(Vs)	large
11	中	zhōng	中	(Vs-attr)	medium
12	小	xiǎo	小	(Vs)	small
13	幫	bāng	幫	(Prep)	for
14	微波	wēibō	微波	(V)	to microwave
15	百	bǎi	百	(N)	hundred
16	塊	kuài	塊	(M)	measure word for Chinese money

図二

- 老闆：請問你要買什麼？
 Lǎobǎn : Qǐngwèn nǐ yào mǎi shénme?
- 明華：一杯熱咖啡。兩個包子。
 Míng huá : Yì bēi rè kāfēi. Liǎng ge bāozi.
- 老闆：你要大杯、中杯還是小杯？
 Lǎobǎn : Nǐ yào dà bēi, zhōng bēi hái shì xiǎo bēi?
- 明華：大杯。包子請幫我微波。
 Míng huá : Dà bēi. Bāozi qǐng bāng wǒ wēibō.
- 老闆：好的。請問外帶還是內用？
 Lǎobǎn : Hǎode. Qǐngwèn wàidài hái shì nèiyòng?
- 明華：外帶，一共多少錢？
 Míng huá : Wàidài, yìgòng duōshǎo qián?
- 老闆：咖啡八十，包子四十，一共一百二十塊。
 Lǎobǎn : Kāfēi bāshí, bāozi sìshí, yìgòng yìbǎi èrshí kuài.

図三

は、留学生は中国大陸に留学するのと同様の学習効果を得られるようになっている。

単語一覧にのみ注音字母が存在するのは、台湾人教員にとっての備忘という側面のほか、学校の外でピンインに慣れていない一般の台湾人に接触する場合に配慮した結果であろう。さらにそこから、中国大陸の普通話ではなく、台湾の言語文化において重要な注音字母にも目を向けさせようとする、製作者側の意図も感じられる。つまり「一步街に出ると学校で習った中国語とは異なる発音や語彙に晒される」という問題を解消させるものと言えるが、一方で教室では普通話の訓練を受けた教員が中国大陸の発音で授業を行っているため、この問題は相変わらず発生し続けることにもなっている。

しかもややこしいことに、漢字音自体は普通話ではなく、かつての「国語」の枠組に従っている。図二の14列目にある「電子レンジで温める」という意味の“微波”の発音は、「国語」の規範に従い、台湾で一般に通用している“wēibō”で記されており、中国大陸で出版されている普通話の権威的辞書『現代漢語詞典』に掲載されている“wēibō”ではない^{xxvi}。台湾人教員もこうした部分については普通話ではなく、「国語」ないし台湾華語のロジックに従っているのである。

四、オンライン授業

2020年から始まった COVID-19 の流行によって、従来は一部でしか行われていなかった学習管理システム (LMS) や Web 会議システムを用いるオンライン授業が、日本の多くの大学で実施された。事情はドイツも同じで、Lin Chin-hui (2022) に拠れば、調査を行ったドイツの台湾人教員の 61.9% が、2020年以前はオンライン授業について全く親しみがなく、あるいはほとんど親しみがなかったが、2020年以後はいわば強制的に対応させられていったと述べられている^{xxvii}。そうした中で、前章で紹介した教科書『Paint Feet on a Snake』の著者の一人で、上記の調査も行った林欽恵 (Lin Chin-hui) 氏は、COVID-19 流行以前から対面授業にオンライン授業を組み合わせる、「反転授業」の取り組みを行ってきた。

反転授業とは、2000年に Maureen J. Lage らによって提唱された方法で^{xxviii}、従来であれば教員が教室で講義を行ってきた内容は、学習者が事前に自宅でビデオを視聴して学習し、逆に従来であれば自宅での宿題となっていた部分について、教室で教員が学習者に指導を行ったり、学習者同士が協働して学習に取り組むというものである。COVID-19 流行以前に林欽恵氏が行っていた方法は次の通りである^{xxix}。

- (一) オンラインでの学習。学習者は事前にオンライン上で新出単語の学習を行い、また教員が設置した YouTube の動画と、それに対する質問を Google フォームで回答した上で、教室での授業に臨む。また教員は教室での授業の前に、学習者の Google フォー

ムでの回答状況を閲覧し、練習問題の正否はもちろん、設定しておいた学習者自身による自己評価についてもよく把握しておく。

(二) 教室での学習。オンラインで行った練習問題を元に、学習者同士の議論や、教員による学習者への助言を中心に展開する。

教員や学習者の中には、この反転授業のあり方に反発を覚える者も少なくないかも知れない。授業というものは一般に、「知識の権威」である教員が学習者に一方的に知識を伝授するものと考えられているからである。そうした考え方は「コンテンツ・ベース」と称される。

一方でこの反転授業が基づいているのは、「コンピテンシー・ベース」という考え方である。これは、授業では学習者が既存の知識を活用して能動的に問題解決を行うことを優先し、教員はそれに対する「助言者」としての役割に徹する、というものである。外国語のコミュニケーション能力養成という観点からは、明らかにコンテンツ・ベースによる一方的な講義よりも、コンピテンシー・ベースによる能動的学修の方が優れており、近年急速に普及したオンラインの動画共有サービスや、アンケート作成・管理ソフトウェアといったオンラインツールを併用することで、高い効果を上げることができる方法だと言えるだろう。

しかし2020年以後は授業がすべてオンラインとなったため、対面とオンラインを組み合わせる上記のような方法はできなくなった。Lin Chin-hui (2021) に拠れば、ドイツにおける全面オンライン授業では、会議システムに Zoom、WebEx、Microsoft Teams、Big Blue Button、学習管理システム (LMS) に Moodle、OLAT、ILIAS、Black Board、Google Classroom など、日本の大学と同様のシステムが採用された^{xxx}。このほかドイツの台湾人教員の一部は、台湾の Facebook グループ「中文教學百寶箱」^{xxxii}を介して意見交換を行い、Quizlet^{xxxiii}、Classkick^{xxxiii}、Whiteboard^{xxxiv}、Wordwall^{xxxv}など、様々なデジタルツールの導入も行った。これは中国と異なり、西ヨーロッパと同じプラットフォームが使用可能な台湾の教育界と繋がっていることによる、台湾人教員の持つ強みであると言えるだろう。

オンライン授業は、会議システムを使った音声面の訓練や、練習問題の画面を共有した解説など、対面ではできない学習者一人一人への丁寧な指導が可能な一方で、対面の教室で行うような筆記試験の実施は難しいという欠点も存在する。しかもドイツの一部の州には、「成績は学期末試験のみで決定されなければならない」という法律があるため、オンライン授業で毎回の指導を元にした形成的評価を行うことはできない^{xxxvi}。そのためもあって、対面授業の復活を希望する教員は少なくないが、一方で以下のようにオンライン教材自体は残すべきだという意見も多い。

(…) 調査を行った教員の85%以上が、オンライン授業によってデジタルツールを活用する能力が向上した、と述べている。また教員の過半数(81%)が、今後教室で授業を行う際は、デジタルツールも一緒に用いることを検討していると答えた。より柔軟で効果的な教育を可能にするため、対面の教室に戻った後も、授業の一部にオンラインが残って行くことは想像に難くない^{xxxvii}。

対面とオンラインの組み合わせは様々な方法が考えられるが、対面授業の様子をオンラインで中継する、ないしは対面とオンラインで同じ授業を行う「ハイフレックス」(ハイブリッド)と呼ばれる方式については、非常な手間がかかる上に、少なくとも学習効果という点ではメリットが感じられないということで、林欽恵氏は否定的であった^{xxxviii}。両者を併用する場合は、対面とオンラインが相補的に機能し、それぞれの利点を引き出すことができる設計が望ましく、その点で先に紹介した反転授業が、アフターコロナの中国語教育でも再びクローズアップされてくるものと思われる。

五、おわりに——多様な“中国語”を受容可能にする授業

今回ドイツの中国語教育について行った調査から得られた知見について、改めて論点を整理すると以下の二点となる。

(一) ドイツの大学には台湾から多くの台湾人教員が派遣されており、現地で中国大陸の普通話を教えている。また古典の需要から繁体字教育にも従事しているが、その延長線上に台湾華語を教える試みも存在する。そもそも中国語は、中国大陸の「標準的」な普通話以外にもさまざまな種類があり、そうした多様な中国語を教えることは、学習者の利益にも繋がるだろう。

(二) 日本同様、ドイツでも COVID-19 の流行によってオンライン授業が実施されたが、そこで認識されたオンライン教育の利点については、完全な対面授業が可能となるアフターコロナにおいても、継続して活用されるべきだというコンセンサスが形成されている。その一つのあり方として考えられるのが、反転授業などの対面授業とオンライン教材を組み合わせる方法である。

(一) の問題は、もちろん中国語だけに限ることではない。英語であればアメリカ英語とイギリス英語などの種類が存在しているし、そもそも発音・語彙・文法などが「標準的」なものとは異なる「方言」を持たない言語の方が稀であろう。そして、かつては外国語教育において

「標準的」でないものは排斥される傾向にあったが、現在では多様性を重視する考えが一般化し、例えば英語教育の分野でも、アメリカ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランドなど、様々な種類の英語の音声を用いたリスニングテストを行う、IELTSのような資格試験も登場している。

ただ、留学生が「一步街に出ると学校で習った中国語とは異なる発音や語彙に晒される」のと同じ状況は、どこの国・地域でも発生し得るとは言え、そうした方言教育は、外国語教育においてあまり盛んではないように思われる。実際問題として、教育現場において当該言語の様々な方言を学習することは、時間や効率といった面で非常に難しい。また、言語学的な関心があったり、その土地で生活していて必要に迫られたりといった場合は別だが、僻地にしか話者が分布していなかったり、話者数が少なかったりして、学習者が接触する可能性がほとんどないような時は、そうした方言を学習する必然性はないと言って良いだろう。

また、例えば英語教育の分野で多様性が重視されてきているといっても、様々な種類の英語を一つ一つ丁寧に学習する課程を設けている学校はほとんどなく、多くは「習うより慣れよ」といった教育方法が採られ、また実際にそれに対応できてしまうという側面もある^{xxxix}。さらに英語の多様性を重視し、アメリカ英語やイギリス英語以外の英語の価値も認めた結果、日本の中学校・高等学校における英語教育は「標準的」とする対象が曖昧になってしまい、発音指導が大きく後退してしまったという、負の側面も存在する^{xl}。

ただし、中国語の官話方言や地方普通話の場合、状況は他の言語と異なっている。14億という膨大な人口を擁することと、「標準的」な言語が諸外国に比べて普及しきれていないことから、中国には膨大な数の官話方言や地方普通話の話者が存在している。例えば先に紹介した天津方言の属する冀魯官話は8,942万人で、この数字はドイツ連邦共和国の人口に匹敵し、また四川方言の属する西南官話は2億6,000万人と、日本の総人口の倍ちかくにもなる^{xli}。

もちろん人口だけで言えば、これらと同様の話者数を有する言語は他にも存在する。しかしそこで問題になるのは、外国人がそうした言語話者と接触する機会がどれだけあるのか、という点である。もちろんどのような言語であれ、研究やビジネスなどの必要性は存在するが、中国の場合は経済発展によって外国人が様々な層と接触する可能性が飛躍的に増大しており、例えば冀魯官話や西南官話のような、「非標準的」な中国語の話者を相手にする機会が格段に多い。さらに中国大陸以外にも、東アジアにおいて政治的・経済的に大きなプレゼンスを有する台湾が存在することは言うまでもない。

戦後の日本の中国語教育は、「標準的」な普通話のみに重点を置いてきた。そしてそれは、地方ごとに方言が話され、国民の間での意思疎通に問題が生じている状況を解消し、国家の統合を完成させるために中華人民共和国で進められた、普通話の普及運動と軌を一にするものであった。だからこそ、台湾人も含む「ネイティブ教員」は、日本においては自らの出身地の方

言を前面に出さず、「標準的」な発音・語彙・文法のみを教えてきた。そしてそれは、普通話だけが中国語であるという、ある種の虚構を構築する作業に参加する行為だったともいえる。しかし二十一世紀に入り、中国全体の生活水準が向上し、非官話圏においては地方普通話も一般化するなど、中国および中国語を取り巻く環境が大きく変化した今、従来のあり方は見直す時期に来ているといえるだろう。中国語教員は今こそ、学習者が多様な中国語を受容可能とする教育を行うべきなのである。

そうした中国語の多様性の教育は、英語教育において英語の多様性を認めていこうとするあり方だけでなく、コンピテンシー・ベースの教育から導き出される世界観にも繋がっている^{xiii}。「標準的」な中国語のみを対象とする従来の中国語教育が、「一つだけの正解」を教員が学習者に「伝授」するコンテンツ・ベースのあり方であったとすれば、多様な中国語を受容可能とする教育は、場面や状況に応じて様々な解があり得るコンピテンシー・ベースと親和性を持つものと言えるだろう。

様々な官話の次方言や地方普通話を対象とした教材が、これまで日本で出版されてこなかったわけではない。代表的なものとしてはまず、1980年代に出版された『中国語なまりングコース』が挙げられる^{xiii}。これは、中国各地を移動しながら現地の人々にインタビューをするという体裁で、様々な官話の次方言や地方普通話の音声を収めたリスニング教材である。現在から見ても非常に優れた内容であるが、音声を複数のカセットテープに収録した教材であるため、当時は非常にコストがかかり、売値が高かった上に非常にかさばるものとなっていた。また、2010年代に中国で出版された『原声汉语』^{xiv}の日本語版の『街なかの中国語』は^{xv}、「ネイティブ」の中国語の聞き取りをテーマとしたリスニング教材で、中国のテレビやラジオなどの音声を収録しているが、一部に官話の次方言や地方普通話の話者のものが入っている。練習問題もあり、教材としてよくできてはいるが、一方で音声の特徴についての解説はほとんどなく、「習うより慣れよ」という性質のものである。このほか、日本国内における台湾への関心の高まりを反映し、近年は台湾華語の教材も数多く出版されているが^{xvi}、当然のごとくそれらは官話の次方言や地方普通話全体をカバーしてはならず、また中国大陸の簡体字やピンインとの比較から正字体や注音字母を学習するという内容にもなっていない。

もちろん、一冊の教科書と付属のCDに様々な官話の次方言や地方普通話の音声を収録し、それぞれの音声・語彙・文法について解説を入れ、さらに簡体字・ピンインだけでなく繁体字・注音字母も表記することは、物理的に不可能なことである。しかしオンライン教材であれば、「教科書の紙幅の制約」から解放される上、音声や文字を重層的に表示することも可能である。また、従来の中国語教育では簡体字やピンインの書き取りを重視してきたが、その延長線上にすべての単語について繁体字や注音字母の書き取りを行うと、学習者に大きな負担がかかってしまう。しかし現在、文書は手書きではなくコンピューターでの入力によって作成する

ことが一般化しており、繁体字や注音字母も、読むことと入力することさえできれば良く、手書きという要素を排除するオンライン教材は、その点でも親和性を有するものと言えるだろう。

こうしたオンライン教材は、もちろん独習用の参考書として出版することもできるが、様々な点で教員の助言がないと習得が難しいことを考えると、中級ないし上級の授業で用いる教材として作成するべきであろう^{xvii}。また、アフターコロナにおいてもオンラインの利点を生かした授業が指向されるのであれば、これを反転授業によって進めて行くのも一つの方法であろうと思われる。

参考文献

- Ewa Zajdler (2019), 王任君 (譯), 〈臺灣對歐洲華語文教學的貢獻〉(Taiwan's Contribution to Teaching Chinese in Europe), 《漢學研究通訊》, 台北: 漢學研究中心, 第38卷第2期, pp.10-17.
- Lin Chin-hui, Maghiel Van Crevel (2015), *Paint Feet on a Snake: An Intermediate Mandarin Reader Traditional Full Form Character Edition*, Leiden: Leiden University Press.
- Lin Chin-hui (2021), *Emergency online Chinese language teaching at the tertiary level: Results of a survey of teachers in Austria, Germany, and Switzerland*, CHUN — Chinesisch-Unterricht, Herrenberg: Fachverband Chinesisch, NR.36, pp.40-63.
- Lin Chin-hui (2022), *Emergency Remote Chinese Language Learning at a German University: Student Perceptions*, Shijuan Liu (editor), *Teaching the Chinese Language Remotely Global Cases and Perspectives*, London: Palgrave Macmillan, pp.57-84.
- Maureen J. Lage, Glenn J. Platt, Michael Treglia (2000), *Inverting the Classroom: A Gateway to Creating an Inclusive Learning Environment*, *The Journal of Economic Education*, Indiana: Taylor and Francis (United States), Vol.31 No.1, pp.30-43.
- 國立臺灣師範大學國語教學中心 (2015), 《當代中文課程1 課本》, 新北: 聯經。
- 黄伯荣、廖序东 (2017) (主编), 《现代汉语 增订六版》, 北京: 高等教育出版社。
- 李渊然 (2021), 〈四川方言环境下的对外汉语词汇教学探究〉, 《文化创新比较研究》, 2021年总18期, pp.149-152。
- 林钦惠 (2018), 〈通过教学设计促进自主学习——一种“翻转”课堂的尝试与思考〉, CHUN — Chinesisch-Unterricht, Herrenberg: Fachverband Chinesisch, NR.33, pp.7-28。
- 刘颖、张少姿、卢颖、郭奇军 (2011), 〈对外汉语教学中的天津方言教学初探〉, 《现代语文》, 曲阜: 曲阜师范大学, 2011年第1期, pp.124-126。
- 骆超群 (2019), 〈服务浙江开放强省战略培养应用型国际化多语种人才〉, 《智库时代》, 太原: 山西社会科学出版社, 2019年51期, pp.108-109。
- 孟国 (2010) (主编), 《原声汉语——初级实况听力教程 (MP3CD)》, 北京: 北京大学出版社。

- 单韵鸣 (2013), 〈方言区对外汉语教学中的语言变异问题——从粤语区普通话的一些变异现象谈起〉, 《海外华文教育》, 厦门: 厦门大学海外教育学院, 2013年第2期(总第67期), pp.146-150。
- 姚蘭 (2015), 《中國大陸漢語國際推廣政策與成效 (2004-2014)》, 台中: 逢甲大學中國文學系中國語文學類博士論文。
- 魏岫明 (1984), 《國語演變之研究》, 台北: 臺灣大學出版委員會。
- 信世昌、張鳳圻 (2009), 〈德國華語教學之發展與影響因素〉, 《教育資料與研究雙月刊》, 新北: 國家教育研究院, 第90期, pp.77-104。
- 熊正輝、張振興 (2012), 〈汉语方言的分區〉, 《中国语言地图集第2版 汉语方言卷》, 北京: 商务印书馆, 2012年, pp.8-14。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (2018), 《现代汉语词典第7版》, 北京: 商务印书馆。
- 太田かおり (2013), 「日本の英語教育における盲点 音声教育の現状と課題」, 『九州国際大学国際関係学論集』, 福岡: 九州国際大学, 8巻1/2号, pp.37-69。
- 小野田滋 (2005), 「上海マグレブ 世界最初の高速磁気浮上式鉄道営業線」, 『電気学会誌』, 東京: 一般社団法人電気学会, 125巻5号, pp.280-283。
- 樂大維 (2017), 『今日からはじめる台湾華語 CD付』, 東京: 白水社。
- 臧世俊 (2014), 「中国の高速鉄道建設の発展と世界的展開」, 『千葉商大論叢』, 千葉: 千葉商科大学, 52巻1号, pp.355-388。
- 中国語情報サービス (1988), 『中国語なまりングコース』, 大阪: 中国語情報サービス。
- 奈須正裕 (2017), 『「資質・能力」と学びのメカニズム』, 東京: 東洋館出版社。
- 古川澄明 (1997), 「ドイツ自動車産業の対中国戦略の転機について—Volkswagen グループを事例として—」, 『東亜経済研究』, 山口: 山口大学東亜経済学会, 56巻2号, pp.207-224。
- 孟国 (2012) (主編)、井田綾 (訳), 『街なかの中国語 耳をすませてリスニングチャレンジ』, 東京: 東方書店。
- 孟国 (2013) (主編)、井田綾、平野紀子 (訳), 『街なかの中国語 Part 2 インタビュー・テレビ番組のリスニングにチャレンジ!』, 東京: 東方書店。
- 孟国 (2014) (主編)、井田綾、平野紀子 (訳), 『街なかの中国語 Part 3 話し手の意図・主張の聞き取りにチャレンジ』, 東京: 東方書店。
- 本名信行、SHARMA Anamika (2021), 『日本人のためのインド英語入門 ことば・文化・慣習を知る』, 東京: 三修社。
- 山下一夫、吉川龍生 (2018), 「イギリスから見た日本の中国語教育——学習指導要領の問題を中心に」, 『慶應義塾外国語教育研究』, 東京: 慶應義塾大学外国語教育研究センター, 第15号, pp.23-45。

注

- ⁱ 山下一夫、吉川龍生 (2018) を参照。
- ⁱⁱ フンボルト大学 (2019年6月10日・12日)、ベルリン自由大学 (2019年6月11日)、フランクフルト大学 (2019年6月13日~14日)、台湾師範大学 (2019年11月20日)、フンボルト大学 (2021年11月19日、オンラインインタビュー)。

- iii 國立臺灣師範大學華語文教學研究所（現隸屬於華語文教學系）の學生必須在臺灣或海外完成教學實習；以歐洲華語教學來說，這種海外實習計畫形成一種特殊的管道，讓吸取經驗的實習生及他們在歐洲當地接觸的CFL學生雙方互惠。（…）現有的管道為臺師大派任數十名已接受CFL教學訓練的研究生在完成碩士論文前先到知名大學實習見識教學現場。這些歐陸院校包括：萊頓大學（荷蘭）、海德堡大學（德國）、明斯特大學（德國）、哥廷根大學（德國）、斯圖加特大學（德國）、特里爾大學（德國）、華沙大學（波蘭）以及捷克的馬薩里克大學、帕拉茨基大學。[p.13]
- iv 2019年の調査でインタビューを行った教員の中では、フランクフルト大学のヴィッパーマン氏（Dorothea Wippermann、韋荷雅）や、ベルリン自由大学のヴァイラウフ氏（Dominik Weihrauch、韋德名）が、過去に台湾留学経験を有していた。
- v 歴経東西徳時期，六〇至八〇年代中國研究及其教學逐漸擴張。漢堡大學、波昂大學相繼成立漢學系或開設中文課程。尤其六〇年代後德國經濟開始起飛，絕大部分漢語學習者都到台灣留學，因此受台灣留學經驗者眾，如葛林（T.Grimm），鮑吾剛（Wolfgang Bauer, 1930-1997），德莫斯（Jürgen Domes, 1932-2001）等人。[p.82]
- vi 信世昌、張鳳圻（2009）、p96-97。
- vii 華語學習的需求與經貿發展常有關連，在2002年，中國大陸超越了日本，成為德國最大的亞洲地區貿易夥伴，亦為於歐盟之外僅次於美國的第二大貿易國，而德國則連續30年中國在歐洲的最大貿易國。為此，許多設有中國業務部門的德國公司招收俱備漢語能力者，以派遣至中國拓展市場。德國明斯特大學一名學生即表示：在德國沒有多少人會講中文，所以我覺得學漢語對找工作會有幫助。現在，在中國有很多的機會，很多德國的公司都到中國設立分支機構，德國同中國的商業關係越來越緊密。[p.80]
- viii 古川澄明（1997）参照。
- ix 小野田滋（2005）参照。
- x 臧世俊（2014）参照。
- xi なおこれに関連して、多くのドイツ企業が進出している浙江省では、人材供給のためドイツ語の実践的な運用能力の養成を掲げる学校が登場している。駱超群（2019）参照。
- xii 姚蘭（2015）参照。なお2019年の調査では、自身が漢弁からの派遣教員としてフランクフルト大学で中国語を担当している王征氏からも、当該内容についての聞き取りを行った。
- xiii 魏岫明（1984）参照。
- xiv 黄伯荣、廖序东（2017）、p.11。
- xv 以上は2019年の台湾調査での台湾師範大学の曾金金氏へのインタビューに基づく。また2019年のドイツ調査では、台湾からベルリン自由大学に派遣されて中国語を教えている陳慶萱氏にもインタビューを行ったが、実際に中国大陆の「標準的」な発音を身につけていることが確認された。
- xvi Lin Chin-hui、Maghiel Van Crevel（2015）。
- xvii 信世昌、張鳳圻（2009）、p.87。
- xviii 当留学生走出校园，与当地居民接触时，会受到较为复杂的方言环境影响，对日常交际造成障碍。例如，在川留学生向市民问路时，市民回答“抵拢（直走）”“倒拐（转弯）”等语句，留学生如果不了解其真正含义，就很容易造成误解。[p.150]
- xix 不管在是语音、词汇还是语法上，天津方言都有不同于普通话的地方。对外汉语教学的首要任务是交给学生运用第二语言进行交际的能力，其次才是了解第二语言的相关知识及其所蕴含的文化知识。留学生在课堂和校园内，可以运用普通话进行交际。而走出校园后，他们所面对的是一个方言环境，适当的方言教学，能使留学生减少社会交际中遇到的语言障碍，扩大他们的交际范围。[p.124]

- xx 熊正輝、張振興 (2012), p.9.
- xxi 熊正輝、張振興 (2012), p.9.
- xxii これに類似した事例は、劉穎、張少姿、盧穎、郭奇軍 (2011) や李淵然 (2021) でも紹介されている。
- xxiii 由于“V+下”在粤语中的绝对强势，粤语区人们用普通话表达动词的短暂体时，往往不自觉地套用粤语“V+下”的形式。普通话里动词一般不能只加“下”，加“一下”虽然不是短暂体的严格形式，但也能表达时间短、动量少的意思。因此，广东人说普通话时就常用“V+一下”的形式。汉语教材一般只说明动词的重叠形式表达动作的时间短和尝试义，留学生在使用时自然也就倾向于使用“VV”式来表达动词的短暂体义。曾经有一个学习很努力的印尼学生诉苦。她说她去买东西时说“我试试，可以吗？”可惜的是，老板娘没听懂，指画半天，老板娘才明白过来，并跟她说，“我们说‘试一下’，不说‘试试’。”那位学生坦言她感到很沮丧，感觉在课堂上学的东西没有用，因为大街上的人并不是那样说。[p.148]
- xxiv 國立臺灣師範大學國語教學中心 (2015), p.67.
- xxv 國立臺灣師範大學國語教學中心 (2015), p.66.
- xxvi 中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (2018), p.1358.
- xxvii Chin-hui Lin (2022), p.59.
- xxviii Maureen J. Lage、Glenn J. Platt、Michael Treglia (2000) 参照。
- xxix 林欽惠 (2018)、および2019年のドイツ調査の際の林欽惠氏へのインタビューに基づく。
- xxx Lin Chin-hui (2021), p46.
- xxxi <https://www.facebook.com/groups/1591925434230401>, 2022年3月1日確認。
- xxxii <https://quizlet.com>, 2022年3月1日確認。
- xxxiii <https://classkick.com>, 2022年3月1日確認。
- xxxiv <https://whiteboard.fi>, 2022年3月1日確認。
- xxxv <https://wordwall.net>, 2022年3月1日確認。
- xxxvi 2021年の林欽惠氏へのオンラインインタビューに基づく。
- xxxvii (….) more than 85% of the teachers surveyed agreed that the online semester had enhanced their competence with digital tools. A majority of teachers (81%) confirmed that they will consider integrating more digital tools into future class teaching. It is also no longer unimaginable that our curriculum will remain partially online, even after the return to the “real” classroom, in order to enable more flexible and effective teaching. [p.77]
- xxxviii 2021年の林欽惠氏へのオンラインインタビューに基づく。
- xxxix 例外として挙げられるのが、特有の発音や語彙を発達させたインド英語で、近年日本では主にビジネス面でのニーズが高まっていることもあり、本名信行、SHARMA Anamika (2021) のような入門書も出版されている。
- xl 太田かおり (2013) 参照。
- xli 熊正輝、張振興 (2012), p.3.
- xliv コンピテンシー・ベースの教育から導き出される価値観や世界観については、奈須正裕 (2017) を参照。
- xlvi 中国語情報サービス (1988)。

- xliv 孟国（2010）。
- xl 孟国（2012）、孟国（2013）、孟国（2014）。
- xlvi 例えば樂大維（2017）など。
- xlvii 初級教科書の構想については山下一夫、吉川龍生（2018）を参照。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「初級学習者を対象としたコンテンツ駆動型中国語学習基盤の構築」（令和3年度、基盤研究（B）、課題番号：18H00682、研究代表者：田邊鉄）による成果の一部である。